

「保育法」講義録から 「幼稚園真諦」を読む

友定 啓子

はじめに

この講義は、昭和九年から十年にかけて行われたものです。この年、倉橋惣三は五十二歳でした。その前年の夏に、日本幼稚園協会の保育講習会で、「幼稚園保育の真諦並に保育法、保育過程の実際」と題する連続講演を行っています。それが翌年十月に、あの有名な「幼稚園真諦」として出版されました。つまり、この二つはほぼ同時期に行われたものですが、この講義のほうが「幼稚園真諦」のすこし後であるということになります。

「幼稚園真諦」はご承知の通り、倉橋の保育思想を知るための代表的なものでありますし、倉橋自身が昭和二十八年の再刊に際しても、「小さな自信は今も変わらぬ」と明言するほどのものでした。そういったことを考えあわせると、この講義は、倉橋の保育思想がほぼ形を成してきた円熟期になされたものであると言うことがで

きるかと思えます。

ところが、この講義録を読むうちに、私は不思議なことに気づきました。それは、「幼稚園真諦」のキーコンセプトとも言うべき「自己充実」、あるいは「充実指導」「誘導保育」「教導」といった言葉がほとんど出てこないことです。同時に「幼稚園真諦」では、表立って取り上げることをしなかった、あるいはむしろ奥に引込めたはずの、一つ一つの「保育項目」を取り上げていることも不思議に思われました。また逆に、この講義の中心でもある「自発の原理」「具体の原理」が「幼稚園真諦」にはほとんど出てきません。

初めは、これらのことから、この講義は「幼稚園真諦」より、以前になされたのだろうと考えました。が、事實は先に述べたとおりです。しかし、この二つがほぼ同時期に行われたものであることを考えれば、やはり何らかの関係があるはずだ、と思って間違いないと思います。外の保育者に向かって語られたことと、内の学生に向かつて話されたこと、私はその「あいだ」に興味を持

ちました。私は、この二つを合わせ読むことによって、倉橋の保育思想がよりふくらみをもってとらえられるのではないかと考えました。

一、「自発の原理」と「自己充実」

倉橋は「幼稚園真諦」の「幼児生活の自己充実」の中で、「幼児の生活それ自身が自己充実の大きな力を持っている」ので、それを信頼して、出来るだけ發揮させていくことを保育法の第一段とおきました。

講義録の中では、「幼児の生活原理から保育原理は生れる」とし、幼児生活の最も重要な特色として、「自発性」を第一にとりあげ、これを保育にもってきて「自発の原理」としています。そして「その（保育の）結果が実に立派であっても、その方法が自発的に非ざればそれは根本原理に背いた大失敗である。」と語っています。

また「育ててやるべき自発は（中略）、子供自身の中より、生活の力が出、そして自ら動いている。」とも表現されていて、先述の「幼児の生活それ自身が自己充実

の大きな力を持っている」とほとんど重なり合うものです。さらに「真諦」の「自己充実」の中で、「心理学風に申しますならば、幼児の生活はその子供一人ひとりの自発性を重んずるということになります」と述べていることから、倉橋においては、「自発」と「自己充実」はほぼ同義に近いと考えてもいいかと思えます。

この「自発の原理」は、「教育」と矛盾するところがあると倉橋は言っています。「教育とはする方、自己が徹底したいのであるが、やはり自発的でなければならぬ」と。これは、「真諦」のあの有名な、「幼稚園の保育は、教育のいろいろの種類の中でも、特に対象本位に、実に対象本位に、計画されていくべきものである、ということ、先ずしっかり断定して置かなければならない」という言葉とつながるものと言えてでしょう。

講義の中で、倉橋は四つの保育原則を出していますが、その第一のものとして「間接教育の原則」を出しました。その中で、「直接では、小さな熱心でも自発性が心配である」とし、「意志を一杯物に含めて待つ事が肝

心である」と語っています。この「物に含めて待つ教育」とは、倉橋が、「幼稚園真諦」において、「幼稚園というところは、先生が、自身直接に幼児に接する前に、設備によって、保育するところ」と述べていることに通じます。この「設備」の力を十分に生かすためには「自由感」が不可欠であるといっています。講義においても、保育方案の前提として、この自由感に触れています。

二、「共鳴の原則」と「充実指導」

「真諦」で、倉橋は「自己充実」に続いて「充実指導」を重要視しました。「子供が自分の力で、充実したくても、自分だけでそれが出来ないところを、助け指導してやる」ことで、その子がどれ位まで求めているかを見極めることが要諦だと述べています。これは、「先生が子供の中に本当にはいきっていないければ出来ない」といって、「外部の標準による指導でなく、相手の内部に即しての内部指導」だと言っています。

講義のなかで、第三原則として、「共鳴の原則」が出

てきます。「(幼児は)自分で自分だけの心の生活を、
していけない。共鳴せられる事に依って、辛うじて子
供は生きるとも言いうる。」また、共鳴は、保母が子供
に直接なすべきだと言っています。この意味で、設備や
自由感を越えた「充実指導」を支えるものと言えるで
しょう。

倉橋は、この講義とほとんど同じ時期に、「廊下で」
と題して、小文を書いています。「泣いている子があ
る。涙は拭いてやる。泣いてはいけないという。なぜ泣
くのと尋ねる。弱虫ねえという。……随分いろいろのこ
とはいいもし、してやりもするが、ただ一つしてやらな
いことがある。泣かずにいられない心もちへの共感であ
る。(後略)」と。保育者が幼児に「共感」することの
難しさを説いています。この講義でも、「共鳴」を妨げ
る「教育意識」を指摘しています。この二つの言葉もほ
ぼ同義に使われていることがわかります。

三、「具体の原理」と「誘導保育」

自発性と並ぶ幼児の生活の特色として、倉橋は「具体
的」であることをあげています。「幼児は自分を分用す
ることを知らず。何時も自己の全体をありのままとし
て、生活させている」ので、子供を分解してはならず、
「全体」として扱わねばならぬと語っています。この考
え方は、保育項目と保育案との関係でも、何度か強調し
ていますし、製作(手技)における抽象主義、技能主義
批判にはつきりと表われています。

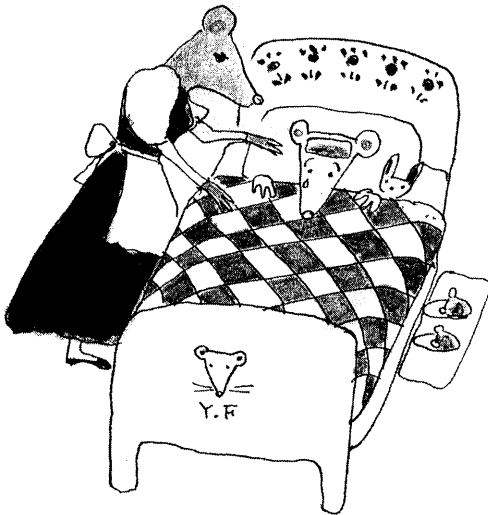
「幼稚園真諦」の「保育案の実際」においても、この
考え方が一貫して主張されています。「こちらの目的を
こちらの理屈でこねあげた保育案が、幼稚園として適当
でないのは当然でしょう。」と「保育項目」を配列した
「保育案」を批判しています。そして、「幼児生活の自
己充実に、こつちで案を立てることは難しい。また、充
実指導にもこつちで案を立てることは難しい。本当に案
らしい案が立てられるのは、幼児生活の誘導のところだ
す。」と述べ、その「誘導保育案」の主題は、子供の興
味そのものから作られてくるのだと言っています。「先

ず、生活の主題が先にあつて、その中に各々の保育内容が入ってくる」のです。ここに、倉橋の「幼児を分解してはならない」という保育原理が生きていると言えます。

四、「相互教育の原則」

この「相互」は、子供同士のことで、先生と子供のことではありません。「子供等に相互の関係で生活させておいて、その関係と云う事を狙う」ことです。これは、自発を尊ぶためでもあり、同時に具体原理を実現するためでもあると言っています。そして、これには、理論的な帰結として、「間接性」「全体性」「生活性」のすべてが含まれると倉橋は講義で力説し、「保育の本質的原則は相互教育である」と断言しています。しかし、なぜか、これに対応するものが、「幼稚園真諦」に見当たりません。しいてあげるとすれば、「保育過程の実際」の「組・分団・個」と「生活態度による分団の組合わせ」なのかも知れません。その中で、「幼稚園は全体主義的生活体ではありません」と言つて、集団の性質に一

石を投じただけに、この「保育の本質的原則」としての「相互教育の原則」の展開が含まれなかったことは本当



に残念に思われます。

五、倉橋の心理主義批判

「幼稚園真諦」とこの講義録をこのように並べて読んでいきますとこの二つはやはり、「表裏の關係」にあると言えましょう。この講義の中で説かれた「幼児生活の原理」、すなわち、「自発」と「具体」の二つの幼児の心理的特徴をつぶさずに、むしろ、生かし、伸ばしていくための教育方法を「幼稚園真諦」で、保育論として展開しているとも言えるでしょう。

ところで、倉橋は教育に学問を、特に心理学を直接持ち込むことを、極力排除していました。「幼稚園真諦」のあとがきで、「本書の語るところ、学問の説を藉りず、学者の言を引かず、ひたすら、人間常識と幼児生活の尊重との間に、当然の保育道を見出したに過ぎない」と述べていますし、また、別のところでは、「個性という問題を心理学的に考えなくても、いわゆる、保育の実際さえ正しく行なわれていけば、心理学的分類から子供

を分類したよりも、より生きたものとしてその子に接触され、自然にその子に適切な教育が行なわれていくことになるのでありましょう」と述べています。

講義では、心理学を基礎として、かなり理論的な言い方をしているように見えますが、その中でも「児童心理では、事実をどこまでも客観的に追及しなければならぬが、教育に於いては、吾々の感情を交えなくてははいけない」と語っています。つまり、心理学上の客観的事実をそのまま持ち込んだのでは、教育にならないと言っています。また、「共鳴の教育効果」を語る時にも、単に子供がうれしただけでなく、「幼児の心中には、育ててやり度くないものがある。〈略〉ここで考えれば、悪には無頓着にしてどうかして善だけを育てる方法を考えたい。その場合、悪は見向きもせず、善のみを育てる光線が欲しい。即ち伸びようとする善に共鳴を与えて、全の力で悪を殺してしまう様するのである」と語っています。客観的な事実とは別に、それをふまえてさらに教育上の願い、言うならば、教育者の感情を交え

なくてはならないと言っているのです。

六、倉橋から現代へ

「幼稚園真諦」に代表される倉橋の保育思想は、本誌読者を中心に現代まで、連続として受け継がれてきました。そして今、新幼稚園教育要領として、よみがえった観があります。このことについては、本誌ですでに柴崎正行氏によって、詳しく触れられていますので、ここでは述べません。

私が、この講義録を読みながら、発見したことを一つだけ、述べてみたいと思います。「自発性」を妨げる理由の一つとして、「自意識」があげられていました。幼児はこの自意識がないので、あの純粹さがあるのだと。それに続く、「自意識の忘れさせねば、自発生活をさせることは出来ない。子供を褒めるといふことは、即ち幼児の自意識に訴える事なのである。促すことである。子供には、修身は教えるべきでない。」という箇所についてです。

この文を初めに読んだ時は、倉橋は変なことを言うなと思いました。普通に、「ほめることはよいことだ」と解釈して読んだので、二番目の文章は矛盾していると思ったのです。ところがどうもおかしいので、何度か読み直し、これは「ほめることは自発生活にとって、よくない」と言っているのだと気付きました。

実は、私も最近「ほめること」に疑問を抱き始めていたのです。近ごろの子供はほめられる事を絶えず要求していると、感じていたのです。そう言う自分も、子供を見ればその子と親しくなるために「何かほめなければならぬ」と感じてしまい、とても窮屈に思ったりしていたのです。そこへ、思春期になって問題を起こす子供たちの中に、「ほめられ症候群」ともいえるような「ほめられていないと安心できない子供」たちの一群がいるという事を読んだので、やっぱりと思ったのです。「ほめてはいけない」とは言いませんが、そして、ただ叱るだけの教育よりはずっとよいとは思いますが、大人と子供の関係がそこに収斂されるのでは、やはり、おかしい

のではないか思うのです。

幼稚園でも、「僕が一番」「私が勝った」といつも気にしている子がいます。そうでも言わないとまるで自分の価値がないように思っているように聞こえます。結局、

評価されすぎているのでしょう。幼児の段階で、すでに人の評価を先取りしているのです。しかも、しまつの悪いことにその評価が、相対的評価なものですから、子供同士が分断されるだけなのです。これが行き過ぎた「自意識」というものでしょう。「一番になれそうもないこと」には、初めからおりてしまいますし、ほめられないことからは見向きもしないのです。こういう子供は、「共鳴」される前に「評価」されていたのでしよう。ほめられて初めて自分が認められたという感じを持ったのに違いありません。ほめることは外部の標準からでもできます。

これが、心理至上主義で、子供を個別の能力に分解し、目先の効果につられた保育をしてきた、私たちに對する一つの答えなのかもしれません。今一度、倉橋の言

う「共鳴の原則」をかみしめてみたいと思っ
ています。そして、幼児の生活の中に「自発性」と「具体性」を再生すべく、力を尽くしてみたいと思います。

引用文献

1、倉橋惣三「幼稚園真諦」『倉橋惣三選集第一巻』フ
レーベル館 昭和42年

2、倉橋惣三「廊下で」『倉橋惣三選集 第三巻』所収
フレーベル館 昭和42年

(山口大学)

